

龍の世界

作家・翻訳家 池上正治



はじめに

中国の龍の造形は古く、約6000年前の新石器時代の遺跡や、約3700年前の夏朝の王族の墓などから出土している。

その後、龍のイメージはさらに豊かなものとなる。大自然の中や、人間の思考および生活の中に、様



新石器時代（約6000年前）、玉製の龍

ざまな龍たちが宿ることに。21世紀になって2回目の辰（龍）年を迎えるにあたり、龍の誕生から現況までを考えてみたい。

辰（龍）年は、12年に1回

暦とは、太陽や月を観測し、時の流れの周期性（日・月・年）を明確化したものである。世界四大文明を築いた民族はそれぞれの暦を作っている。この四大文明という表現は、日本や中国など東アジアだけで通用し、西欧などでは「文明のゆりかご」と表現されている。

暦は、数十万年にわたり狩猟・漁労・

採集を生業としてきた人類が、約1万年前、新たに農耕社会を築くために必須のチャートだった。中国の暦の最大の特徴は、陰陽と五行ごぎやうを統合したところにある。

具体的には、10の干かん（幹）と12の支し（枝）を組み合わせ、それに五行（木・火・土・金・水）と陰陽を配し、10と12の最小公倍数である60をひと周りとする。こうした構造（次ページの図）であれば、過去および未来へ無限に遡及することが可能である。やや複雑ではあるが、これを理解しなければ「辰（龍）の年」へと話を進めることができない。

十干	五行	陰陽	十二支	音読み	訓読み		
甲	木	兄	子	1 甲子	こうし	きのえね(ずみ)	
乙		弟	丑	2 乙丑	いっちゆう	きのとうし	
丙	火	兄	寅	3 丙寅	へいいん	ひのえとら	
丁		弟	卯	4 丁卯	ていぼう	ひのとう(さぎ)	
戊	土	兄	辰	5 戊辰	ぼしん	つちのえ たつ	
己		弟	巳	
庚	金	兄	午	
辛		弟	羊	
壬	水	兄	申	
癸		弟	酉	10 癸酉	きゆう	みずのととり	
			戌	11 甲戌	こうじゆうつ	きのえいぬ	
			亥	12 乙亥	いつがい	きのとい(のしし)	
				41 甲辰	こうしん	きのえ たつ	今年
				60 癸亥	きがい	みずのとい(のしし)	
				61 甲子	こうし		還暦

中国の暦は、十干・五行・陰陽・十二支を総合

「今年のエトは？」
 「辰です」という会話をよく耳にする。エトは干支であり、正しくは十干十二支、すなわち天干地支のことで、会話は十二支（地支）に限定したものである。子にネズミを、丑にウシを、辰にタツ（龍）を配当したのは、誰にでも理解できるようにという配慮からである。

完成したのは、1924（大正13）年のこと。この年のエトが甲子（こうしきのえね）であることから、球場の名前が付けられた。

龍は、どう考えられていたか

孔子が「龍のような人間」として賛嘆したのは、老子である。二人が対面する次ページ上段の図のレリーフ（浮彫）が作られたのは、いまから2000年以上前の漢代のこと。儒教と老荘、『論語』と『老子』、それは中国思想界の対極に位置する。孔子がいう「龍」は、老子が自分よりも上という評価であらうか？

楚の憂国詩人・屈原の『離騷』に龍が頻出する。例えば、「余がために飛龍を駕わす」「蛟龍を呼びよせ渡し場の橋になつてもらう」など。楚の指導層で讒言にあい、国の将来を憂えた屈原は汨羅で入水する。この事件をめぐっては、チマキやドラゴンボートなどの物語があり、今日まで日本でも共有されている。

その龍も、いつしか権力者の占有す



孔子（左）が老子を龍になぞらえた浮彫

るところとなり、龍顔・龍袍などの表現が生まれた。三皇五帝の一人・黄帝は、鼎を作り終えると、龍にのって昇天したという。人祖とされる伏羲と女媧は、ともに人身獣尾。その長い下半身は、大きな蛇すなわち龍を彷彿とさせる。

治水に成功し、夏朝の始祖となった禹を中国では、大禹ないし禹王という。その「禹」という名前の一字の中に、「虫」すなわち龍が隠されている。北方の龍と、南方の鳳とは、中国を代表する二大トーテムであり、両者の融

合の過程そのものが中国の歴史である、という仮説が成り立つかも知れない。龍は空想上、想像上の動物というのが大方の見方であるが、龍の実在を力説する『龍―一種不明的動物（龍―ある未解明の動物）』（馬小星著、上海社会科学出版社）はなかなかの好著である。

龍は、どう形づくられてきたか

龍骨なるものは、中国の伝統医学の薬材として長らく用いられてきた。清朝の儒臣・王懿榮（1900年没）は、書家としても有名な人。彼にはリウマチの持病があり、龍骨などの薬材を煎じて服用することを日課としていた。ある日、その龍骨の表面にある模様気づいた。絵？ まさか文字？

この龍骨には産地がある。河南省安陽の殷墟である。古代王朝・殷の廢墟、を意味する地名だが、それを真に受ける者は当時、ほとんどいなかった。しかし、王

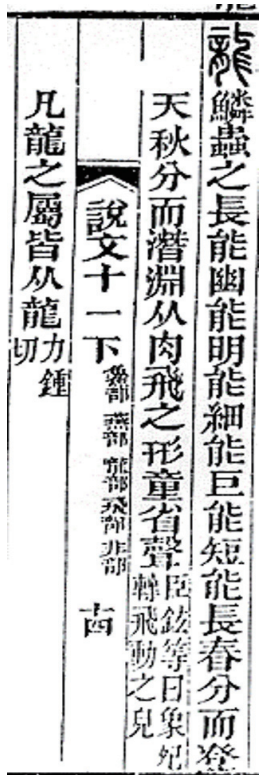


甲骨文字の石碑をならべれば、甲骨碑林

懿榮のこの「発見」を機として発掘が行なわれ、そこが本場に殷の王宮跡であることが実証され、龍骨の模様が「甲骨文字」であると証明されるまでには、一定の時間が必要だった。

筆者がその殷墟を最初に訪れたのは1988年のこと。全国重点文物保护单位（国宝）とはいえ、まだ整備の途上、という印象だった。それから約30年、殷墟はユネスコの世界遺産に登録され、国家5A級観光地となった。甲骨文字を石碑にし、それを並べた「甲骨碑林」は、必見の場である。

さて龍の形状であるが、約6000年前、新石器時代の祭器と思われるも



約2000年前の『説文解字』に解説された龍

だろう。その最たるものに竜巻（トルネード）がありそうだ。見るみる間に飛

みると、自然の地形を巧みに利用し、いかにも強固な構えだった。こうした防壁は、戦国時代、齊（山東省）や晋（山西省）にも作られた。

来し、小さな家や動物などを巻きあげ、持ち去ってしまう。

そして長江と黄河に代表される大きな川がある。全長は、長江6380キロ、黄河5464キロ、流域人口は、長江4億5千万人、黄河1億1千万人。どちらも源流から河口まで主な部分を、ほぼ見ているが、これぞ龍である。

それを一変させたのが秦の始皇帝である。全国を統一した彼にとり、各国の防壁はもはや無用であり、備えるべきは匈奴に代表される北方騎馬民族である。これが「万里」の長城のスタートである。その事業は後世、漢代や明代でも継続された。長城の主要部分の総計は約1万キロ、支線部分も含めれば、2万キロ超となる。まさに巨大な龍である。

そうした龍になぞらえられるのが、万里の長城。その原型は、紀元前7世紀、楚（現在の湖北省・湖南省）に築かれた方城だとされる。そ

龍門のように、龍のついた地名も少なからずある。山西と陝西の省境にあ

特筆すべきことは、約2000年前、許慎により字書『説文解字』が著わされ、そのなかで龍が解説されたことである。またほぼ同時期、王符の「龍の九似説」により龍のイメージが定着した。かくして龍は、もはや想像上の存在というより、あたかも実在する動物であるかのように認識されることになる。

龍は、どのように自然界に潜むか

大自然の中に超然とした力の存在を認める、それが「龍の発見」だったの

こは現在、湖北省ではなく、河南省にあり、楚の国の北の防衛線だったと思われる。現地を歩いて



万里の長城はまさに巨大な「龍」

り、登竜門の故事でしられる龍門、雲南省の昆明の西郊外にあり、眺望絶佳の龍門。河南省の洛陽にあり、四大石窟の一つ龍門など。

龍井りゆうせいといえ、浙江省の杭州にあり、天下の名泉である。その一帯はまた、銘茶・龍井の産地でもある。

中国の伝統的な地理学では、大地の「気」が流通するルートを龍脈りゅうみゃくといい、その「気」が湧きでるポイントを龍穴りゅうけつという。地形が山から平地になるあたりなら、龍脈の見当はつけやすい。だが龍穴に関しては、中国で確認したことはなかった。それを日本で二つ確認できた。一つは京都府の伊根であり、二つ目は奈良県の室生だった。伊根の龍穴にそっと腕をいれると、わずかな風の流れが感じられた。

龍は、どう変わってきたのか

龍の形象は、皇帝の住まいから文房具まで、あらゆる所に、変幻自在に現れる。冒頭で触れた石器時代の玉製の龍は、内モンゴルの出土、高さ26センチ。胴体のほぼ中央に穴がある。金属



皇帝専用、大理石の龍の階段は、17m、260トン

を知らない石器時代人が、どのようにして玉（石）に穴を開けたのだろうか？その穴にひもを通し、吊るすと、頭と尾が水平の位置で静止するという。思うに、この玉の龍は祭器の一つだったのではなからうか？

二つ目に紹介したいのは、2002年、河南省で出土した緑松石龍形器である。

夏王朝（紀元前2100〜1600頃）の支配者の墓にあった埋葬品で、2000個以上の緑松石（トルコ石）から成る。これは器というより、私見では、埋葬者を龍に見立て、彼を造形化したものである。

小さいながら、精巧に加工された龍

のアクセサリが流行したのは、2000年前の漢代。支配者たちはそれを腰のあたりに佩び、楽しんでという。なんとも優美なことではある。

建造物に目を転じると、龍の石段、九龍壁、碑林などがある。皇帝の専用、

重さ260トン、大理石の階段は、ピラミッドの石が平均3トンほどだったことを思えば、その巨大さが知れるというもの。運搬は厳冬期、道路に水をまいて凍らせ、その上を滑らせたという。これもまた大した知恵である。

九龍壁は、中国でいう「邪の気」の侵入を防ぐという。山西省・大同にある中国最大の九龍壁は、横45・5、高さ8、厚さ2メートルと雄大で、そこに踊る9匹の龍は雄渾そのものだ。爪の数は、4。

碑林といえ、西安。中国の歴史的著述が石に刻まれ、まさに林のように並んでいる。いつも拓本をとる人がおり、墨の香が漂い、パンパンと音が聞こえ

る。一部の石碑の上部にわだかまるのは、鱧ちとよばれる雨龍あまりゅうで、碑石を守る。

手の平にのるほどの銅鏡や、硯などの文房四宝にみる龍たちは、造形美のレベルの高さを主張しているかのようである。

龍は、どのように語られてきたか

言葉のなかの龍に目を向けてみよう。中国でも、日本でもよく使われる四字熟語に「画龍点睛がりょうてんせい」がある。これには実在の画家・張僧繇ちやうそうようがおり、彼が壁画に龍を画いた寺も実在する。

物語の真偽のほどは、読者の判断にお任せしよう。

日本では有名だが、中国ではほとんど使われないのが「龍頭蛇尾りゅうとうだび」である。その理由は、思うに、出典が禅宗の問答集『碧巖録へきがんろく』だからだろう。その逆に、中国ではよく使われ、日本では知名度の低いのが「龍蛇飛動りゅうだひどう」である。その意味は、書道の筆づかいが非常に速いこと、ときに書いた本人も

何を書いたか分からなくなる、というもの。

「葉公、龍を好む」もまた日本ではあまり知られていない。葉公は実在した人物であり、楚の国の重鎮であり、孔子とも交友があったと『論語』に書かれている。

その葉公の龍好きは有名だった。屋敷の梁や壁には龍が画かれ、龍の書画の収集も熱心だった。これを聞いた龍は喜び、ある日、天界から下りてきて、葉公の家を表敬したという。ところが、あれほど龍を熱愛していた葉公が、本



画龍点睛を絵にすれば

物の龍を一目見るなり、「助けて！」と叫んで逃げだしたとか…。

逆鱗ぎやくりんの一語は、戦国時代、法家の立場にあった韓非の『韓非子』を出典とする。

いわく「龍という動物は、うまく馴らせば、人がそれに乗れるほど、おとなしい性格であるが、喉の下に直径一尺もある鱗が逆向きにはえている。もし、それに触れようものなら、かみ殺されてしまう」と。逆鱗はまた、君主の性格を暗示した表現でもある。

臥龍がりゅうとは、大きな才能を秘めながら、活躍のチャンスを待っている人物のこと。

日本でも人気のある「三国志」の諸葛孔明は、その典型である。まだ無名だった諸葛亮を迎えるべく、蜀王の劉備が関羽と張飛をつれて、表敬すること3回。「三顧の礼」は語りつがれ、その舞台となった湖北省・古隆中に三顧堂がある。

中国は広く、長い歴史があるため、龍が弱者となるケースもある。新疆ウイグル自治区のキジルを訪れたのは1

995年8月のこと。熱砂の砂漠を車でまる一日、300キロ以上走り、緑のオアシスに着いたのは夜8時。安堵感に浸る。

目的の一つが第38窟の壁画に画かれた怪鳥・迦楼羅カールラと白い龍。この鳥は別名を金翅鳥こんじちようといい、日本の古い寺院には安置されている。仏教説話によれば、この鳥は羽根を広げれば360万里となり、口からは火を噴き、毎日食べるのが大きな龍1匹と小さな龍500匹：天竺（インド）の話も、中国と同様、氣宇壮大である。

龍は、どう暮らしにかかわるか

全部で12ある地支いわゆるエトのなかで、龍（辰）は唯一、空想の動物？である。龍以外の牛や羊など11は全て実在する。そうした理由からか、龍には超然とした力量が感じられると同時に、辰年にはある種の違和感がある。天変地異が時を選ぶはずもなく、偶然の所産であり、その確率はエトでいえば、12年に1回と考えるべきだ。にもかかわらず、過去の例をあげて警鐘



農暦の正月15日、衆目を集める龍踊り

を鳴らす人もいる。中国人が話題にする「龍の年」がある。毛沢東と周恩来が亡くなった1976年、英国が中国侵略の口実としたアロー号事件の1856年、清朝を衰退させる原因となった1796年の白蓮教徒の乱、唐朝に引導をわたした黄巢の乱が収束した84年など、いずれも辰年なのだ。その龍と人間の生活の關係に目を向けてみよう。農暦では、1月15日が龍

灯トシ、2月2日が龍抬頭ロンタイトウ、5月10日が分龍節フンロンチエである。農暦は新暦（西暦）にくらべ約1か月遅く、正月は新暦の1月下旬から2月初旬あたりだ。今年今年は、2月10日が農暦の正月。爆竹が鳴りひびき、初めて体験する外国人は仰天し、肝を冷やすだろう。龍灯の別名は、龍踊り。数人から十数人の男たちが、竹の棒に連ねた張り子の龍を、上下左右に踊らせながら、街を練り歩く。江戸時代、これが長崎に伝わり、「蛇踊り」となり、今日まで演じられている。大きな蛇は、龍である。

2月の龍抬頭は農作業の開始を、5月の分龍節は大雨への警戒を、それぞれ内容とする。このように年3回、暦に龍が登場する。

日本にも、行事や暮らしとかかわる龍ないし蛇はかなりいる。青森県・五所川原で夏に行われる「虫送り」がある。それは病虫害の駆除を願う行事だ。白装束の若者たちがかつぐのは、稲わらで作った「虫」で、行列の先頭をいく虫は、どう見ても龍の頭だ。岩木川のとおりで、この虫たちに火がつ

けられ、炎上する。大きな虫すなわち龍が、たくさんを率いて天高く、姿を消すようにとの願いがこめられているという。

雨乞い行事の主役は、中国でも日本でも、水の神とされる龍である。日本各地にある雨乞い行事だが、これまで見たなかで一番印象に残るのは、埼玉県鶴ヶ島の脚折雨乞い行事だ。脚折は地名である。4年に1回のこの行事をつぶさに取材したのは、2回前の辰年の2000年のこと。長さ36メートル、



龍鍋で庶民の餃子を賞味すれば

重さ3トンの龍蛇は竹で骨格を作り、麦わらで頭から尾までを作り、笹の葉で全身をおおう。とにかくデカイ！神職のお祓いの後、約4時間かけて街中を練り歩き、終点の雷電池へ。「雨ふれ！たんじゃく、ここにかかれ黒雲」という掛け声とともに、龍蛇は池のなかで解体される。一場の壮大な雨乞い劇だった。

龍に見たてた小舟を漕ぎ競うドラゴンボートは、中国に源があり、屈原を救出するためだったという。それは日本の各地にも伝わり、沖繩ではハーリー、長崎などではペーロンという。

生活がらみでは、南方の果物の龍眼などがあり、薬材にタツノオトシゴなど、また皇帝が好んで用いたとされる強壮剤に龍菜がある。

最後になるが、餃子は最も庶民的な食品である。その餃子を、北京と西安で、皇帝をイメージさせる龍鍋で賞味したことがある。豆粒ほどの小さい餃子を、ウェイトレスがお碗に入れないから「吉祥かぞえ歌」をやってくれる。いわく、お碗の餃子が「1つであれば

順風満帆：5つであれば五穀豊穡：0であれば悪いこと無し」と。口福を楽しみながら、耳もまた悦ばせるという食文化に、脱帽！

龍と、類似物、似て非なる物など

古今東西を見わたすと、龍と、類似する物や、似て非なる物が少なからずある。例えば、南アジアのナーガ、中南米のククルカン、欧州のドラゴンとワイバーンなど、以下、それらを簡単に紹介する。

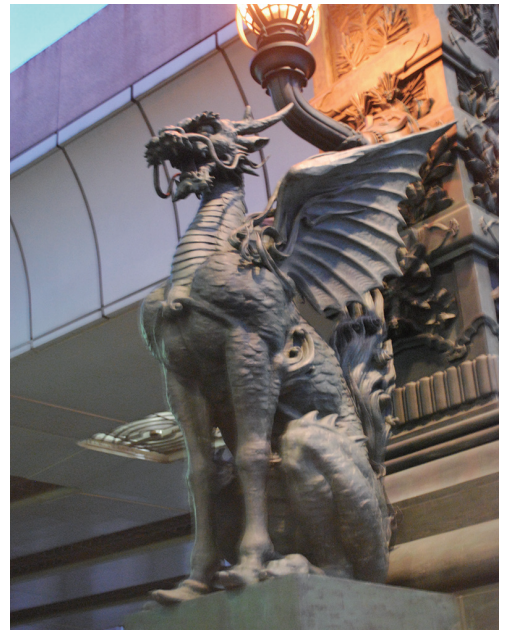
ナーガは本来、古代インドの神話に登場する地中の蛇神である。そのイメージ起源は、一説によれば、大型ワニすなわちクンピールだという。ナーガはさらにコブラのイメージを加え、現在ではインドよりはむしろ周縁のラオスやタイで、仏陀の守り神となり、建築物の一部となっている。海から宝物が湧き出る「乳海攪拌」は、ナーガが主役であり、インド文化圏で広く共有されている。

ちなみに四国の霊場・金毘羅さんは、クンピール信仰の延長線上にある。

中米（メソアメリカ）で、マヤ文明やアステカ文明など、巨大なピラミッドをもつ農業文明が栄えたのは、BC3世紀からAD16世紀のこと。年2回、春分と秋分の日、壮麗なピラミッドに降臨するのが農業神ククルカンである。太陽が沈む瞬間、ピラミッドの長い階段の手すりだけが夕日を浴びて、光り輝く。それがククルカン（羽根をもつ蛇の意）だ。

欧州のドラゴンは、ギリシャ神話の時代から、強大な力をもつ存在だが、火を噴き、人畜に被害をあたえるとして、撃滅される対象である。ゼウスはドラゴンと死闘をやり、ヘラクレスはドラゴンを退治する。キリスト教は4世紀、古代ローマ帝国の版図に広がり、大きな宗教となり、ドラゴンもまた大天使ミカエルらによって撃滅される。ドラゴンには、キリスト教と対立する宗教が投影されているようだ。

このように、欧州のドラゴンは、中国の龍とは全く別の物である。字書など



東京・日本橋のワイバーン

で、ドラゴンは龍、龍はドラゴン、とされることもあるが、明らかな誤りだ。信頼できる字書であれば、ワイバーンを翼龍としている。これは正しい。ワイバーンはドラゴンによく似ているが、大きな違いは翼をもつことだ。さらに大きな違いは、守護という役割をもつこと。例えば、英国のロンドン橋のたもとに立派なワイバーン像があり、橋を守っている。東京・日本橋にもワイバーンの像があることは、あまり知られていない。

おわりに

中国最古の龍の造形は、約6000

年前、新石器時代の玉製の龍であろう。その後、龍のイメージは多様化の一途をたどり、皇宮から庶民の家まで、多種多様の龍が存在する。龍に、幸運や豊作を祈願したりもするが、ときに「暴れ龍」にもなる。龍の国と、その龍を伝える人たちを、これからも注視、観察していきたい。

（2024年1月17日・公開講演会）

筆者略歴（いけがみ・しょうじ）

1946年生まれ、東京外国語大学中国科卒。著書に『気の不思議』（1991）、『徐福』（2007）、『龍の世界』（2023）など、訳書に『中国科学幻想小説事始』（1990）、『中国養生術の神秘』（1999）など、編著に『中国旅行全書』（1980）、『徐福—アジア2000年の青い鳥』（2003）など、中文書に『一个日本人眼中的中国』（1998）など。著訳編書の総計70余冊。